センター通信

（第４４・４５合併号）

責任編集：清水展　呉咏梅　　郵便番号：100081　Tel:8424893　　1995,4,7

新学期が始まってすでに１ケ月が過ぎました。編集委員の清水の着任が遅れたために，今回は３月，４月の合併号となりました。

ニュース

◇２月２８日：１９９４　１９９５学年度の春学期が始まりました。今学期は、先学期から継続の長期派遣教授３名に加えて、新たに８名の教授が着任された。また中国側は、３名の客員教授、１０名の客員研究員が招請された（そのうち新規は５名）。

◇３月２０日：９期生２０名が訪日研修に出発しました。彼らは日本各地をまわる研修旅行をしたのち、それぞれの所属大学の指導教授のもとで半年間，資料収集と研究活動をおこない、修士論文を作成します。

◇３月２１日夜７：００：新任派遣教授のための歓迎会が皇苑大酒店で開催された。新任教授の全員、留任の教授、センターの教職員、および国家教育委員会、基金北京事務所、在中国日本大使館、北京外国語大学の関係者などが多数参加しました。

◇３月２３日：今学期第１回目の公開講座が開かれた。今学期は，一般市民への公開を積極的に進めるために，３回の講演を国際交流基金北京事務所で催す予定です。

◇３月２４日：北京外国語大学外事処の主催による北京ビール工場の見学活動が行われた。当センターの派遣教授および家族８名が参加し、中国のブランド品　北京ビールを賞味した。

◇３月２５日：８期生の卒業式が行われた。穆大英副学長、小熊旭基金事務所所長があいさつをされたのち、厳安生主任および竹内実主任教授より卒業生に学歴証書が授与された。また８期生の代表が答辞を述べた。

◇４月３日：第５回派遣の博士課程留学者４名が日本に出発した。

◇４月６日午後４：００：竹内実主任教授による「金印の謎」と題する公開講座が、基金北京事務所ホールで開催された。

北京日本学研究センター1995年度博士課程留学者名簿

氏　名	専　門	修　論　テ　ー　マ	受入大学	指導教授	備考
壟　穎	日本文化	寛永期林羅山の思想と中江藤樹の思想	東北大学	玉懸博之	4期生
徐向東	日本社会	異文化における日本的経営　中国への導入と第３次文化形成の課題	立教大学	笠原清志	5期生
徐　滔	日本文化	明治以後の陽明学観と大塩中斎	東京大学	池田知久	6期生
秦　剛	日本文学	『羅生門』私論　下人からのアプローチ	東京大学	野山嘉正	6期生

１９９５年度春学期☆公開講座日程表☆

回数	日時	講演者	題目
第1回	3月23日	富山一郎	国民の誕生と「日本人種」
◎第2回	4月 6日	竹内　實	金印のなぞ
第3回	4月13日	山口敏幸	日本語らしさを決定づける諸要素について
第4回	4月20日	浅野純一	黄遵憲「日本雑事詩」およびその周辺
第5回	4月27日	秋山元秀	東アジアにおける日本と中国：地域構造論から見て
◎第6回	5月 4日	北川　透	日本近代文学の原点：北村透谷の文学と思想
第7回	5月11日	古田　啓	日本語の男女差
第8回	5月18日	矢口俊昭	日本国憲法と基本的人権
第9回	5月25日	川嶋将生	室町時代の公家と武家
◎第10回	6月 1日	小泉　仰	福沢諭吉について
第11回	6月 8日	篠崎摂子	中国の日本語教育事情
第12回	6月15日	岡野道夫	詠嘆と哀傷

◎印は国際交流基金北京事務所ホールで開催予定

（参加ご希望の方は，当日の整理券などの都合がありますので，国際交流基金北京事務所〈tel:500-6523〉までご一報ください。）

新任専科の一言自己紹介

秋山　元秀：1949年，京都生まれ。中華人民共和国と同年ですが数カ月年長。専攻は人文地理，歴史地理。最近は中国をフィールドにしているので，ここでの生活は本当にありがたいと思っています。何度も来ていますが，生活する立場から中国を眺めるのは新鮮です。また変化の最中にある中国を実感できるのも幸運です。帰るまでに自転車が何回パンクするか楽しみです。

岡野　道夫：1937年東京浅草生まれ。幼くして各地を転々としましたので生粋のというわけではなく，したがって野暮です。にもかかわらず専攻は日本文学（古典）とくに「源氏物語」です。何にでも首をつっ込みたくなるやじ馬根性の持ち主。何かとお誘い下されば幸いです。

川嶋　将生：1942年三重県生まれ。日本中世文化史が専門。とりわけこの時代の重要な文化の担い手である非差別民に関心を寄せています。勤務先の立命館大学では剣道部部長（ただし本人は竹刀をさわったこともなし）。外国での長期滞在は初めてで，また中国語もこれまで学んだことなし，という身です。

北川　透：1935年愛知県生まれ。大学卒業後，高校教師を九年間。1967年から19年間は＜もの書き＞の生活，詩や文芸評論を書いて気ままに暮らす。1986年から愛知大学教授。91年に本州最西端の下関に移住，梅光女学院大学で教える。中国ははじめてなので，何でも見たい，感じたい，味わいたい，と思っている。

小泉　仰：1927年ヴァレンタイン・デー，東京は渋谷の生まれ。慶大で３３年間倫理と倫理思想史を教え，４年前ＩＣＵに移り，近代日本思想史を担当しています。中国に来て嬉しいのは，学生とのラポールが出来つつあることと，中国の生活に魅力を感じ始めたこ

とです。驚いていることは，中国の現代化の猛スピードぶりと，逆にセンターのコンピューターの貧弱さ，私の中国語の幼時的状態です。

篠崎　摂子：1963年生まれ。埼玉県浦和市にある国際交流基金日本語国際センターの日本語教育専門員です。日本でも中国やその他の国の日本語教師の研修を担当しています。1992年８月まで２年間北京大学に留学していたので，また北京に帰って来られてとても嬉しいです。任期は６月末までですが，よろしくお願いいたします。

古田　啓：1958年福岡生まれ。日本語学。最初は西洋人が行った日本語研究を対象にしていたが，大学を三つも変わるうち，底の浅い「何でも屋」になってしまったようです。好きで始めたパソコンの趣味が，だんだん，「お仕事」になってきてしまいました。日本に残してきた２才の息子が，ときどき夢に出てきます。

矢口　俊昭：1945年12月静岡県に生まれ，東京中野に育ちました。現在は神奈川大学法学部に所属し，憲法を講じています。研究は日本とフランスとの憲法裁判の比較を中心としています。スポーツをはじめ何にでも興味はあるのですが，あまり積極的な性格ではないので何かありましたらお声をかけていただければ幸いです。よろしく。

１９９４年～９５学年春学期 客員教授・客員研究員一覧

１.客員教授

氏名	生年	所属先	専攻分野	担当科目
程　嘯	1938	中国人民大学政治思想文化研究所	中国思想史	中国思想史
劉潤清	1938	北京外国語大学語言研究所	言語学	一般語言学
朱春躍	1958	北京外国語大学日本学部	日本語学	日本語学各論

２.客員研究員

氏名	生年	所属先	専攻分野	研究テーマ
李　平	1955	中国人民大学経済学部	工業経済	日本産業組織政策
高淑娟	1955	河北師範学院法律経済学部	経済文化	GATTと日本国内の経済発展
馬紅娟	1964	北京大学ｱｼﾞｱ・ｱﾌﾘｶ研究所	日本現代史	現代日本女性
牛建科	1960	山東大学哲学学部	日本社会	禅と日本哲学思想
張秀敏	1961	海南大学文学院	日本社会	女性の就職と家族の在り方
李　強	1953	北京大学東方学部	日本文学	中国現代文学の日本近代文学からの受容について
周以量	1964	北京外国語大学日本学部	日本文学	歌物語と中国文学
施建軍	1966	洛陽外国語学院	日本語学	言語情報処理における言語学研究
劉暁路	1953	中国芸術研究院美術研究所	美術史	近代における中日美術の交渉史
林　泓	1954	山東大学日本研究中心	国際関係論	現代（戦後）中日関係

北京新聞（Beijing Xinwen）

秋山元秀

私は中国を飯のたねにして随分になりますが、中国の飯をこんなに長く食うのははじめてです。これまでの慌ただしい日程の旅行や学会とは違い、今回は北京の暮らしをゆっくり楽しんでいます。最初に北京に来たのが1977年の正月でしたから、それから数えれば20年近くになります。来るたびにあれよあれよと変わってゆく北京の姿に、ただ呆然と立ち尽くしていてもしかたありませんので、できるだけせっせと自転車のペダルを踏んで出かけることにしています。もっとも最初に北京の最近の様子をつかんでおきたいと、風と砂塵の中を外城一周自転車でやったらさすがにまいりましたが・・・

こちらへ来て最初は、いくら外見が変わっても中身はそんなに変わっていないだろうとたかをくくっていました。しかし、ほぼ一ヶ月たち、この変化はこれまでの政権の権力闘争による世相の変化や、建築ブームによる厚化粧だけではないと思うようになりました。ハードが変わってもソフトが変わらない、それが中国だ、と思ってきたのです。しかし今は、アヘン戦争から150年をへて、ようやく中国に本格的な「現代化」が、内からの力として動きだしたのかと思っています。

もちろん旧弊が突然にして改革されるわけはなく、人間そのものが急速にかわるわけはありません。特に形だけの現代化にふりまわされながらも、何とか合理的に仕事をすすめようとしている人ほどその矛盾を強く感じているでしょう。中国人自身がこの変化をどうとらえるか、戸惑っているようです。しかしどうも中国は知らない間に大海原に漕ぎだしてしまった帆船のようです。結局自分で舵をとって行くしかないし、以前のように「大海の航海は偉大な舵取りに・・・」というようなわけにはゆかないでしょう。もっとも「船頭多くして・・・」かもしれませんが。

しかし文革の時も、この変化こそ本物だといっていた専門家もたくさんいましたから、あまり中国についてはこれこそ本物だとか、ここにこそ画期があるというのは控えておいた方がよいでしょう。

ところで私は北京にきて何をするか――もちろん授業は別にして――については、あまり考えていませんでした。いささかの宿題も携えてはきたのですが、生来計画的行動ができないので、犬も歩けば棒式に北京へ行ったら何かにぶつかるだろうくらいに思ってきました。確かに色々なものにぶつかりました。その中で、今いちばんおもしろくて時間を費やしているのは新聞を見ることです。テレビやラジオはよく聞き取れません。テレビの映像はとてもおもしろいのですが、ゆっくりこちらが消化する前に画面がどんどん進みます。そんなわけで、新聞は今の私にとって最もおもしろい情報源なのです。ご承知のように新聞を中国では報紙といい、中国語の「新聞」はニュースという意味です。中国語の方が原義に近い使い方をしているわけです。

今私は人民日報、北京晩報、文匯報（上海）の3種類の新聞を部屋でとっています（6月末までで合計147元でした）。賓館が無料でいれてくれるChina Dailyや人民日報海外版をいれると4種類の新聞に、毎日ゆっくり眼を通すのが日課になりました。中国の新聞は日本の新聞のように膨大なページ数はありませんし、各々の新聞によって特色がはっきりしています。おかげで一ヶ月たってだいぶ合理的に眼を通せるようになりました。

日本にいるときも一応中国の新聞を定期講読はしていたのですが、実はほとんど眼を通したことがありませんでした。怠惰のせいでもありますが、生活の実感のないものが新聞を見てもぴんと来ないというのも一因であったと思います。それに中国の新聞、特に人民日報などは政治のプロパガンダばかりで社会の実態とはかけ離れている、というのが定説でしたから。

しかしこちらにきて新聞を一見して、おもしろい話題がいっぱいあるのに驚きました。人民日報にしても私から見てけっこうおもしろい記事を載せています。ああまた同じことを言っている、金太郎飴だという記事も少なくありませんが、ときどきはっとする論文もあります。北京晩報は北京市民にいちばん人気のある新聞ですが、日本でいう夕刊紙的な記事もけっこうあり、読んでいて飽きません。着いてすぐの北京晩報に今子供に人気のあるインスタントラーメンの記事があり、高いのは一個10元以上もするというのに驚きました。しかもその記事でインタビューされているスリッパを履いた老太太というのは、何と賓館の近くの双楡樹食品店の自選商場で買い物をしているではありませんか。後で行ってみると確かに一個10元以上の高級ラーメンがありました。ちなみにその老太太の孫の好きなブランドは「新人類」の牛肉面だそうです。

その他ご紹介したい記事はたくさんありますが、思わずにやりとする最新の「新聞」を最後にひとつ（北京晩報4月4日7版）。

上海には中国で最初にできた婦女児童心理諮詢熱線（電話相談）があるそうですが、1992年にできた時にはなかったのに、翌93年になってから増えているのが「性騒擾」の相談だそうです。「性騒擾」とはいうまでもなくセクハラのことでしょう。ある若い夫婦は、奥さんがある合資企業の弁公室の秘書をしているのですが、経理（社長）がしばしば彼女に対して「動手動脚」をしかけるそうです。しかし彼女はその仕事がとても気に入っているので辞めたくはない、どうしたらいいのだろうか、という相談です。またある若い未婚の女性は、その「単位領導」がやはりしょっちゅう性騒擾行為をおこす。彼女が拒絶すると、外に向かってあることないことを言い触らし、とうとう今の恋人とも気まずくなってしまった、というのです。

そこでこの相談所では、給料を千元以上（！）もらっている合資企業の秘書や、秘書を兼務している女性の性騒擾の実態を調査したそうです。詳しくは省略しますが、傑作なのは性騒擾者の使う方式の調査があって、その方式には「物質」で気を引く、「口頭」で誘う、「暗示」して脅かすというのがあり、多くの場合は各種の方式を「併用」するそうです。そしてそのような性騒擾に女性達がどう対処しているかについては、大部分の女性は困ったとは言っているものの、こういう上司の扱い方には「熟練」しており、「回避」の方法を知っているそうです。それがうまく行かない場合は、仕事をかえるという人もいるけれど、一部の女性は「利用他！」と答えたそうです。

ことわるまでもなく性騒擾が中国で新しい現象であるなどとは思いません。合資企業がどうのこうのはさておき、古今東西ありふれたことでしょう。しかしそのありふれたことをありふれたように相談したり報道することが、かつての中国ではいかに難しかったか、その点で今の中国に新しさを感じているのですが、いかがでしょうか。

あれやこれやで、私は毎日「新聞」の森の梢の中をさまよっているばかりで、いっこうに持ってきた宿題や本業にとりかかれません。またこれも一つの北京新聞でしょうか。